

馬場保昌先生
追悼文集 デジタル版

歩

馬場保昌先生
追悼文集 デジタル版



馬場保昌先生を偲ぶ会 追悼文集 制作委員会

追悼 馬場保昌先生

杉野 吉則

昨年10月6日に逝去された馬場保昌先生に哀悼の意を表すとともに、長年にわたって我が国の胃X線診断学を牽引いただいたことを深く感謝します。

馬場先生は大学卒業後、癌研病院で中村恭一先生のもとで病理学を研修された後、熊倉賢二先生の門下で胃X線診断学の研鑽を積みましました。熊倉先生が慶應の教授に就任され、私が指導下にあったため、以後、癌研と慶應の共同でX線装置・造影剤・撮影法などの研究の会議、あるいは学会・研究会でお会するようになりました。

その当時、すでに馬場先生は我が国の胃の診断学の分野では、X線診断ではトップレベルで内視鏡医や病理医からも一目も二目も置かれる存在でした。そして、熊倉先生のX線診断学と中村先生の病理学に基づいて臨床症例を綿密に検討されることにより、比類なき診断理論を構築されました。

さらに先生は、後進の教育にも熱心に取り組み、消化管診断を志す医師のみならず、胃がん検診に携わる放射線技師の指導もされておられました。臨床の場だけでなく、夜中まで症例の画像をマクロ・病理と自ら詳細に対比され研究されていました。さらに対外的な様々な研究会にも出席され、あるいは自ら勉強会を主宰されて、医師技師の区別なく、時に厳しく、時に丁寧にわかりやすく教えられました。馬場先生の参加された勉強会や研究会、講演会はつねに参加者が会場にあふれていました。

私がかつとも感銘したのは撮影された早期胃癌のX線画像でした。その画像は先生の胃癌診断学の根源でした。先生の画像は病変を細部まで描出されており、マクロ所見そのままであり、さらに病理所見まで類推できるものでした。画像はごく自然に病変が表されており、一見、特別な技法などは感じられませんが、じっと見ていると胃の伸展度や造影剤の付着、胃の形状や撮影体位など計算しつくされたものでした。私にとっては生涯の目標でありましたが未だに超えることはできていません。

その技術を伝授され、診断学を習得された医師や技師の皆さんには、切磋琢磨して馬場先生を超える画像を撮影するとともに、次世代に技術を伝承されることを期待しています。

1990年代後半から、馬場先生と細井董三先生に私も加えていただき、胃がん検診を改革しようという活動を開始しました。「胃がん検診精度管理研究会」として発足し、後の「NPO日本消化器がん精度管理評価機構」になりました。その成果の一つが「基準撮影法」でした。発表後、瞬く間に全国の検診施設に浸透し、旧来の検査法から二重造影法を主体とする撮影に切り替わり、明らかに検診の精度は向上しました。「基準撮影法」についても馬場先生のリーダーシップがなければ達成できなかったと考えています。

直接お聞きしたことはありませんが、馬場先生は常により良い画像、より新しい知見を目指して進まれてこられました。そこには全く妥協はありませんでした。

後進の皆様には、常に前を向くという意を理解して、先生が確立されたX線診断をそのまま継承するのではなく、先生から教わったX線診断学への姿勢や方法論を理解した上で、より新しい検査方法や診断理論を構築されることを強く望んでおります。



厳しさと優しさ，努力と継続の偉才

浅田 栄一

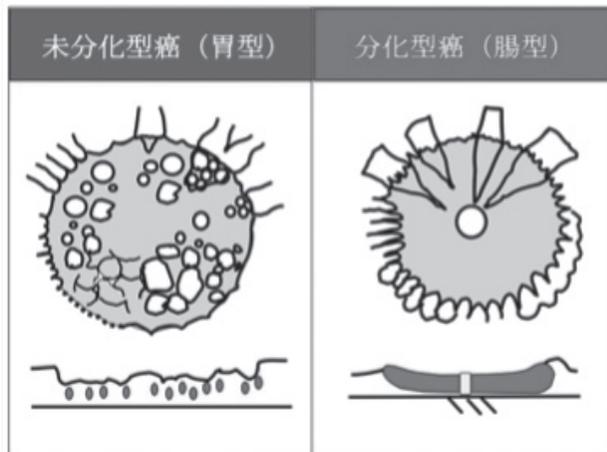
馬場先生に初めてお声がけ頂いてからほぼ半世紀になります。

当時のX線TV装置はカセット方式が主流で近接X線TV装置を用いる精密検査では、四つ切、六切のカセットが20～30枚超というのが当たり前の時代でした。丁度、久留米大学の国内留学で癌研究会癌研究所病理研修から、癌研究会附属病院内科研修に移られた頃です。

先生は1974年日本消化器病学会で開催されたシンポジウムで「陥凹性早期胃癌の組織型とX線所見との比較対比」を發表されています。發表の前には故熊倉賢二先生，故菅野晴夫先生らの前で，多くの症例を繰り返して試されたと言いました。

この「陥凹性早期胃癌の組織型とX線所見との比較対比」は，当時の癌研究会附属病院レントゲン診断部での技師勉強会として熱心にお話いただいた姿が，今も眼瞼に思い浮かびます。

癌組織型別にみた陥凹型早期胃癌の特徴



その後の数多くの論文，講演，著書などは，今日の撮影，読影・診断の基本となり，今も消化管検査に携わる多くの方々の向上心を刺激し続けています。

先生の胃X線検査に関わる事柄への厳しさは、癌研時代に研修に来られていた先生方は勿論、見学に訪れていた技師の方々や東京胃会、馬場塾、NPO日本消化器がん検診精度管理機構、日本消化器がん検診学会などの講演会、症例検討会を通じて知られています。

先生のご指導・ご助言は、小生など技師のどんな小さな発表での原稿や資料でも、必ず目を通してくださいました。先生の指摘はセンテンス (sentence) を短く、平易な表現。など基本的な事柄を詳細に指摘してくださいました。思い返しても誰かれ分け隔て無く、厳しくも優しさ溢れる指導者であったと記憶しています。

そんな医師・技師に対する細やかで適切な指導はもとより、懇親会などでの親しみやすい人柄は多くの人を魅了し支えとなり、先の学会、研究会などを通じて今も全国に根付いています。

一方で、先生のご趣味は多種・多彩で日々の体力作り、空手、鮎釣り、絵画、ゴルフ、料理など多岐にわたっていました。愛犬家だったことも忘れられません。飼われていた愛犬が出産した際、産まれた未熟な子犬にサクシオンカテーテルで栄養補給していることも話されていました。塾で育てていた千年木が花を着けたことにもお喜びでした。

無類の愛妻家であったことも忘れられない一面です。奥様が長くご入院されていた時には勤務終了後毎日お見舞いに行かれ、その際には必ずご自身が作られた食事を持っていかれました。人間「馬場保昌」という方は、何をするにしても愛情を持って接していたことは勿論ですが、その献身さは到底言葉では言い現すことができません。

2021年2月12日（金）午後、「物を飲み込み難い、食道か入口部かな」と、胃の検査をするよう指示され、その画像を診られた後は「仕方ないなあ」と検査室を後にされました。そのうしろ姿は今も眼に焼き付いています。

その後、2022年10月6日までの長く過酷な闘病中も、ギリギリまで業務を続けられただけでなく、その間も最後の最後まで渾身の思いで「胃X線読影に必要な基本的な事柄」【基礎講座テキストの改訂版】の見直しに尽力されていました。

常に教えられたのは「何故じゃ？ どうしてじゃ？」という素朴な問いかけです。いまも、検査・読影に限らず、物事の本質は「楽をしない」「手を抜かない」根柢を持って表現しろと言われてるように思います。

胃X線検査・読影・診断に人生の全てを費やし、その情熱で多くの人財を育てられた努力と継続の天才馬場先生。短くも長い間、胃X線検査に携わる全ての人に愛情と情熱を持ってご指導いただき本当にありがとうございました。そのお志は関わった多くの後進に長く受け継がれて行くと信じます。

これまでのご功績・ご功労に感謝すると同時に、心から哀悼の意を表します。

2023年葉月



馬場先生を偲ぶ会に寄せて

青森県総合健診センター附属あおもり健康管理センター 稲葉 雅志

馬場先生の偉大なる業績に深く敬意を表し、心よりご冥福をお祈り申し上げますとともに、ご家族の皆様のご健勝を心からお祈り申し上げます。

2014年10月、私は宮城県内で東京胃会ゴルフコンペ大会に参加させていただきました。

先生の頑張りどころでぴょんと小さく跳ねるドライバーショットは、シャフトの撓りを利用した理想的なスイングであり、パターでの踵体重でストロークしていたのは綺麗な順回転をボールに与えるためだったのですね。誰よりも愉快地進んでいたコンペ。あるホールで先生のボールがトラブルとなったその瞬間、私達はまるで機嫌の悪い日に症例検討会で読影を指示された出演者のように凍り付きました。しかし、そこはさすがの馬場先生、なんとナイスリカバリショットで「どうだ!!」という嬉しそうな仕草を見て驚喜した瞬間を思い出します。

また、私のNPO精管構指導講師試験の際、最初の4問を不正解、他を満点で合格した時は、「お前はNPOって何か理解していないだろ、勉強しろ」と叱られ、東北代表技師を拒み続けていた時、仙台のとある場所で馬場先生から電話で一言「お前がやれ」でしたね。

私は、入社して間もなく検診データのPC整理から、1989年に県のがん登録による検診の評価分析に従事する機会があり、偽陰性例に直面しました。受診者は自分の親類家族と同様だとしたら、この陥凹病変、隆起の表面形状が描出されていない画像が情けなくて何度も涙したことを覚えています。

その後2000年、青森県が主催する講習会に馬場先生と佐藤清二様をご一緒にお迎えし、当県では珍しく80名を超える参加者と、私の勤務先の読影担当医師にも多数列席いただきました。先生は冒頭に「エックス線

検査の読影が出来ない医者を頼りにするな、まあここにはいないと思うが・・・」といきなりの先制パンチにてスタートされましたね。高濃度低粘性粉末バリウムが、全県下に行き渡らない頃で、先生のご講演の後、職場では読影委員会の粉末バリウム200%W/Vの方向で指示を得、まもなく学会発表された標準化撮影法も一気に導入することが出来ました。これも全て馬場先生のお陰でございます。その後、二重造影法の優れた点を推し進め「機器」や「製剤」、「各撮影技師の評価」、通常手技による落とし穴について反省し、単に病変が描出できたということではなく、前回の読影・精検結果などが参照できるレポート機能を含めた読影環境はどうあるべきかを職場のスタッフで討論し、感度向上を目指していたことを思い出します。2017年、それらの資料をもとにし第117回東京胃会の発言では、まだまだ未熟である我職場を露呈することとなりとても良い経験をさせていただきました。

今後とも先生の教えである「画像診断は推理小説、肉眼所見さらに組織構築を推し量る」を忘れることなく、胃X線検査で面倒な画像の整理や所見・精密検査・ハイリスクなどの記録を進め、また読影の視線を損なうことない検査に努めて参ります。

馬場先生、今まで本当に有難うございました。



馬場先生，ありがとうございます。

東京都立がん検診センター 所長 入口 陽介

馬場先生は，胃X線診断の黎明期から隆盛期を牽引された中心人物の一人であり，とくに放射線技師さんから尊敬されておられました。学生時代に空手部で鍛えた肉体づくりを継続し，老眼鏡を必要としない視力の鍛錬回復や奥歯がないけど歯茎で肉をかみ切ることができるなど，鍛錬することで人間の身体は進化していくと自慢気におっしゃっておられたことを思い出します。

馬場先生を初めてお見かけしたのは，私が昭和大学藤が丘病院に勤務していた平成8年12月13日の金曜日夜，茗荷谷駅前のエーザイで開催されていた癌研×都がんの胃X線診断研究会，1例に相当な時間をかけて詳細な検討に驚いた時でした。

その時，都がんにはいた大学医局の先輩の尾崎先生から，「あの人が厳しい馬場先生で，こちらは優しい八巻先生」と紹介を受け，「それから多摩がんの細井先生が人を欲しがっている。来春，多摩がんにも異動するか否か1週間以内に決めろ」と言われて，4か月後，多摩がんにも勤務することになりました。

その後，東京胃会，早期胃癌研究会，茅場町研究会，胃X線精度管理研究会，NPO精管構などで多くの症例検討を通じて，撮影法や読影について勉強させて頂きました。また大塚のアジトやスナックにも2回ほどお邪魔させて頂き白壁賞の盾を拝見したり，さらには，二重造影法のみ「基準撮影法」が作りあげられていく過程にも触れさせて頂きました。

印象に残っておりますのは，初対面から10年ほど経過した東京胃会で，Latent LPのスキルス胃癌の症例を呈示した際に，「胃X線12枚の呈示画像のうち1枚を除いて完璧」とのお褒めの言葉を頂いた時は，嬉しく，その後の励みになり，Linitis Plastica型胃癌を身近に思えて，胃X線診断の最も得意とする分野と感じました。

私はどちらかというと、学問的なことよりも、ゴルフなどの遊びでの交流が多かったような気がいたします。2007年3月21日の写真ができましたので添付いたします。

時間が経つのは早い！健康で遊べる身体づくりとワクワクする何かを見つけて、残された時間を過ごして生きたいと考えている今日この頃です。



 ザ・ゴルフクラブ亀ヶ崎

2007年 3月21日(水)

馬場保昌先生を偲んで

淳風会健康管理センター 大角 博久

馬場保昌先生と初めてお会いしたのは、1998年、東京都予防医学協会へ施設見学に伺った時だと記憶しております。その夜、馬場塾の雑居ビルへお邪魔しました。故 松本史樹氏が症例スライドの作成作業をされていました。室内はフィルムと資料、機材が山積になっており威厳のある雰囲気には圧倒され緊張しておりましたが、馬場先生は搾菜を使った料理を振舞って下さいました。見学から戻り、二重造影主体の撮影法を導入出来ました。

当時、私は恩師である前川進氏(元枝川内科胃腸科)に様々な施設や勉強会へ連れていってもらい、馬場先生のご講演にも出来るだけ参加して顔を覚えていただき、講演依頼をすることが出来ました。

2006年、淳風会健康管理センターのリニューアルイベントで、ご講演をしていただきました。その際の打ち合わせ等で、自分の職場における症例検討のやり方について悩んでいたのを相談し、基本理念に沿った社会福祉への貢献、研鑽、努力などを指導していただきました。これは今でも自分の行動の基準となっております。

また、岡山で開催していた消化管撮影研究会「たけのこ会」(故 丸元譲代表世話人)では、2度ご講演をしていただきました。うち1回は2009年に開催し、故 中村恭一先生とお二人をお迎えしてご講演をしていただきました。非常に贅沢なご講演でした。

東京胃会や東京Jr.胃会、九州で参加者限定のはがくれ胃会にも参加させていただき、拙い読影と症例提示を行い、時に厳しくご指導をいただきました。

東京Jr.胃会のJr手帳作成、書籍「胃癌X線診断の究極」において多くの症例を掲載していただき、症例提示にあたって多大なご指導をいただきました。

ある研究会で、バリウムの腸流出を防止するためには、バリウムを飲

用してすぐに透視台を倒せば良いとご指導をいただきました。今でも撮影指導時、必ずそのことを話題として話しています。常に論理的に考えながら撮影し、基準撮影法を遵守するという当たり前のことを当たり前実践していくことの大切さを学びました

いただいた小冊子「良悪性判定の基本所見と胃癌X線診断の取り組み方」には、馬場先生の直筆で「学兄 馬場保昌」と書かれておりました。私のバイブルとして、引き続き学んでいきます。

先生にいただいたものばかりで、何も返せず、自分の目標である胃X線検査精度の底上げには未だ至ってはおりませんが、常に考え、学び、今後も継続して活動を行っていきます。

先生のご冥福を心よりお祈りいたします。



馬場先生を偲んで

東京都立がん検診センター 小田 丈二

馬場先生と初めてお会いしたのは、1994年、私が研修医の時でした。熊本の関連病院にいた時に、馬場先生の講演があり聴講しました。当時、医学雑誌『胃と腸』で拝読させて頂いていた有名人であり、直接お目にかかる機会などないものと思っていました。その時の講演内容も『胃癌の三角』であり、当時研修医2年目で、消化器を始めたばかりの私には、全く理解できない内容でした。その後2000年に上京し、多摩がん検診センターで勤務してからは定期的に東京胃X線診断研究会に参加するようになり、顔と名前を覚えていただけました。早期胃癌研究会では食道胃接合部癌症例の読影をあてられ、頓珍漢な答えをしていますが、司会の馬場先生にフォローしていただき、とてもありがたく感じたことを今でも覚えています。

早期胃癌検診協会に移られたあとも、多摩がんととの合同勉強会を企画していただき、X線の読影だけでなく撮影に関してとても勉強をさせていただきました。NPO設立後もX線に対する姿勢は変わることなく、熱く指導していただきました。静岡での学術集会の懇親会場で、最近便が出てないと言われ、大腸の検査をおすすめしましたが、その後入院加療されたこともつい最近のように感じます。

肉眼的異型度を用いた読影基準を作成するにあたり、できるだけ急いで作るぞとお叱りを受けることも多かったです。なかなか完成に至らず、でした。そこでやり取りする中で、馬場先生の考え方に触れることができたように感じます。大変勉強させていただきました。

病変の成り立ちとX線所見、病理組織所見とがどのように関係しているのか、いつも事細かに追求され、その考え方が今の自分の診断学に大きな影響を与えてくれました。新型コロナの影響で、お会いできないままのお別れとなってしまう、とても残念でしたが、馬場先生の胃癌に対する想いや考え方は沢山の医師や技師に受け継がれています。向こうでも大好きなX線と病理を、時間を気にすることなく眺めていることと思います。

高校の大先輩である先生のご冥福をお祈り申し上げます。

馬場保昌先生を偲んで

小野寺 礼子

私が消化管と出会ったのは40年ほど前で、代々木病院に入職してからでした。当時癌研で研修した内科医が消化管を担当しており、幸いにも私の胃X線検査は癌研病院方式でスタートしました。よく馬場先生の素晴らしい写真と「陥凹型早期胃癌の癌組織型別特徴」の話題になり、初心者には難しかったのですが、著名な先生と仕事の出来る癌研の放射線技師は幸せだなーと羨ましく思ったものです。何となく撮影が出来るようになってから馬場先生の講演には出来るだけ参加をし、チーム医療主催のセミナーには3回も通いました。その時のテキストは基本から応用まで初心者にも理解しやすく、職場等の勉強会にも活用させていただきました。

それから十数年後、馬場先生と直接お話をする機会に恵まれました。それは、

1. 代々木病院の読影依頼、
 2. 胃X線精度管理研究会設立時、
 3. 早期胃がん検診協会での研修、
- でした。

1. 代々木病院の読影依頼

当時の代々木病院は完全デジタル化されていませんでしたので、フィルムをキャリアバッグで運び読影をしていただきました。最初はとても緊張しましたが、先生の幅広い豊富な話題と料理人でもあり、画家でもあることにその緊張がほぐれました。読影時には撮影法も加えて理論的な説明をして頂き、代々木病院の技師も幸せだなーと思いました。

十数冊か数十冊か記憶が定かではありませんが、とにかく多くの症例のシェーマノートを見せていただいた時には私も若い技師も日頃の姿勢を反省させられました。さらに、先生のご配慮でスキャナーをお借りし、保存していた症例をアナログからデジタルに変換することが出来ました。先生からは多くのことを学び感謝のみです。

2. 胃X線精度管理研究会

設立の時に声をかけていただき、仲間入りをさせていただきました。
代々木病院だけで撮影をしていた私は、検診精度に地域や施設による差が、これほど大きいことを認識していませんでした。後にその実態を知り、基準撮影法と精度管理の必要性を強く感じた瞬間でした。各種会議や勉強会・学術集会等全国を回ったことで多くのことを学び、私の財産となりました。

3. 早期胃がん検診協会での研修

定年後に研修として1年程撮影をさせていただきました。検診機関での撮影は初めてでしたが、馬場先生の下で撮影ができたことは得るものも多く、貴重な宝物となりました。

先生の著書、テキストはいつも目を通して勉強させていただいています。直ぐに忘れやすい私には馬場塾発行の内容が凝縮されたテキストが合っているようで、手元においております。本当にありがとうございました。

心よりご冥福をお祈り申し上げます。



馬場先生を偲ぶ

杜の都産業保健会 鎌倉 克行

消化管の分野でご活躍の先生方はたくさんいらっしゃいますが、東北では馬場先生がもっとも有名で殆どの消化管撮影している診療放射線技師が存じ上げております。

今では基準撮影法や胃癌の三角は誰でも知っておりますが東京胃会仙台大会を開催した当時、特に健診団体以外の宮城県の病院で消化管撮影をしている技師は基準撮影法も胃癌の三角も知らない技師が少なからずおりました。そこで、当時馬場先生をお願いして仙台で「基準撮影法」や「胃癌の三角」のご講演をご依頼致しました。当初馬場先生は違う演題を考えておられましたが、宮城や東北の病院技師の話をしたら講演内容変更をご快諾していただきました。通常、宮城の勉強会は数十人程度の参加者ですが、知名度のある馬場先生のご講演ということもあり約200人の参加者が集まりました。

馬場先生のご講演のおかげで宮城の消化管撮影技師の底上げが一気にでき、この時から宮城のレベルが上がっていったと言っても過言ではありません。

折角、馬場先生に宮城のレベルを上げて頂いたのに、このまま何もしないままでは申し訳ないので定期的に基礎的な勉強会を始めました。宮城には主に健診団体向けに比較的レベルの高い宮城消化管撮影研究会がありますが、主に健診でなく病院で消化管撮影をしている技師向けに勉強会を開催しました(初回は宮城県放射線技師会館で開催)。特に研究会名は決めておりませんでした。「仙台胃会」と呼んでおりました。

そんな折、東京胃会後に馬場先生の研究室で「仙台胃会」の話をしたら大変喜んでくださり勉強会で使用できる資料をたくさん頂きました。今度、自筆で「仙台胃会」を書いてくださるともおっしゃって頂き大変ありがたく思いました。

二か月に一回、東京胃会に参加して参りましたが仙台から来ていると

いうこともあり、お気を使っただき毎回症例検討会の読影者にして頂きました。私も地元の勉強会では教える立場にあり、地元の勉強会では中々スキルが上がらなかったのですが東京胃会では毎回勉強になりました。

馬場先生が司会の症例検討会は厳しくもあり大変楽しくもありました。私が根拠のない読影をすると指摘してくださり納得するまで教えて頂きました。毎回ご指摘されたところは復習して自分のものにしますが、最後まで馬場先生の前で納得のいく読影ができなかったのが未だに心残りです。

本当に馬場先生の東京胃会は初級者から上級者まで勉強になる勉強会でした。

勉強会の後は馬場先生の研究室で雑談をしていましたがとてもやさしく、とてもユニークな馬場先生でした。

今では「基準撮影法」や「胃癌の三角」、技師による症例検討会が当たり前のようになっていますが、もし馬場先生がいなかったら、こんなにも全国で消化管撮影をする技師のレベルアップはしていなかったと思います。

特に健診に携わる診療放射線技師が仕事に夢中になり誇りをもって仕事ができるようになったのも馬場先生のおかげだと思っております。

今後は馬場先生から教えて頂いた事を後輩たちに引き継いでいければと思います。

馬場先生今まで大変ありがとうございました。謹んで哀悼の意を表します。

馬場先生との遊びを通して

- 人に対する優しさと奥様への愛情 -

(公財) 神奈川県予防医学協会 木村 俊雄

「おーい 木村君！直接撮影の基準となる撮影法がないので作るぞ」
基準撮影法の作成はこの一言から始まりました。今では全国に普及し、その効果については今更述べるまでもありません。このように「スタートのシグナルは馬場先生からの発信」でした。「遊びの話」の前に、ちょっと一言でした。

さて本題の話ですが、ここでは馬場塾での思いではなく、馬場先生との遊びを通して感じたこと、特に先生の遊び方などについてちょっと触れてみたいと思います。

まず一つ目、「おーい 木村君！いい陽気になったので、棒を振り回し芝刈りに行くぞ」これが先生とのゴルフプレーの始まりでした。

二つ目、「おーい 木村君！夕方から時間空いているか？中国語の勉強に行くぞ」。これが先生との麻雀の始まりでした。

そして三つ目、勉強会や研修会の後に「おーい木村君！呑みに行くぞ（もちろんカラオケも）。」これが先生とのより深いお付き合いの始まりでした。

このような先生との勉強以外のお付き合いは、早期胃癌検診協会に勤務してからで、私は既に50歳を過ぎていました。もちろん撮影技術や読影知識をお教え頂いたのは言うまでもありませんが、私の場合はどちらかという、勉強よりも遊びを優先に？お付き合いさせて頂いたように記憶しています。

そして先生は、こうした遊びについても、勉強と同様に理論そして根拠に基づいて楽しんでいらっしゃいました。例えばゴルフの場合、「木村君、スイングは、体の軸中心の円運動と左サイドへの引く運動との連動だぞ。運動力学を理解して練習せよ」とよく言われました。このスイング理論は先生の持論でもありました。そして実際のコースでは先生との真剣勝負となりますが、自己流の私が勝つことは殆どありませんでした。あまりにも私が負け続けると「これを奥さんに」と、お土産すら持たしてくれました。お土産はほんの一例ですが、その他にも、さまざまな面での人に対する思いやりそして優しさなど、人間味溢れるお姿を、

幾度となく拝見もしてきました。人への気配りの重要性・必要性は先生からお教えていただいたと思っています。

そして、次に麻雀です。これも先生らしい一面を見ることが出来ます。単純な“ツモ牌まかせ”の役無しの打ち方はせず、場の“全捨て牌”の状況から様々な打ち方（統計的に）を熟慮され、また対戦相手の心理的な面をも観察しながら打ってきます。なかなか負けてくれませんでした。また、この麻雀は奥様も積極的にやられ、ご夫婦の共通の楽しみでもありました。ここでも先生の間人味溢れるお姿を垣間みることが出来ます。皆での麻雀のとき、奥様が楽しく喜んで打たれるようにと、先生の奥様への気配りそして優しさ、これは周りからみても愛情すら感じられるほどでした。お二人が笑顔で楽しく麻雀をやられているお姿を拝見していると、勝敗のことなどは頭からすっかり消え去り、もちろん私が勝つようなことは殆どありませんでした。

そしてお酒の席、ここでも奥様を大事にされているお姿を見ることが出来ます。特にカラオケでの先生の十八番、フランク永井の『おまえに』は毎回熱唱となります。歌詞の『♪おまえの他に誰もいない、♪そばにいてくれるだけでいい♪』と、奥様に対する最大限の愛情表現すら感じられるほどでした。そして酔いが深くなると隠し芸が披露されます。奥様からのお教えでしょうか？演歌が流されると突然と日本舞踊を踊り出すことがあります。先生はネクタイを歌舞伎での鉢巻きのように頭に巻き、手の指先の動き方、目線の持って行き方、頭の傾け方など、女形を見事に演じられます。酔いのせいとはいえ素人とは思えないほどの演技力を披露されます。

こうしてみると何事に対しても中途半端なことが嫌いで、負けずきらいだった先生のお姿が、走馬灯のように懐かしく思い出されてきます。まだまだ色々あるのですが、先生の間人味溢れる一面を思い出しながら書かせていただきました。

ご冥福をお祈りいたします。

馬場保昌先生を偲んで

剛崎 寛徳

先生が令和4年10月6日12時51分に永眠なさり（享年78歳）、すでに約1年が経過しようとしています。あらためて、追悼の意を表しますとともにご生前のご厚情に対して深く感謝いたします。

先生は熊倉賢二先生に師事なさり、撮影法の基準化や胃X線診断学の発展について、細井董三先生や杉野吉則先生とともに歩んでこられました。歴史を重視され、先人の功績を忘れず、講演では必ず先達のお名前をみることができます。

また、胃X線検査・診断学の第一線で独自の業績を残されました。「新・胃X線撮影法」の開発や、「基準撮影法」の普及に尽力なされたことや、読影・診断学において肉眼的異型度の概念を導入なされたことは、多くの業績のごく一部にすぎないと思っています。

私ごとですが、「馬場塾」・「東京胃会」・「消化管X線診断研究会」では、叱責いただいたこともありましたが、優しく声をかけていただいたこともありました。「読影基準における良性悪性判定とは？」とか、「異常像とは何か？」など、ことあるごとに問われました。こうした機会がなくなったことは寂しい限りです。

思い出の一部を記しましたが、その他の数多くの思い出は私の心に大切にしまっておくことにし、遺文をここに示しておきます。

検査・診断に従事するものは、常にその目的と意義を明確にすることを意識する必要がある。そして、常にどうしてか、何故か、そして根拠は何か、何を主張するのかなど、問題意識をもち、原点に戻って考えてみる（原点回帰）。

胃癌診断の歴史を紐解くことによって、診断に派生する知見を得ることができ、あるいは疑問に思うことがあろう。慌てずにじっくり構え、これらを把握し、吟味して自身の胃癌X線診断の体系構築の糧にする。つまり、「温故知新」である。

そうすることによって、将来の方向性も自ずと見えてこよう。天命を迎えるまで瞬きほどの時間しか残されていないが、これまで通り楽しみながら、生きていくことにした。

今頃、先生は天国で先立たれた奥様と仲睦まじく一緒に過ごされていることでしょう。

とは言っても先生のことですから、天国でも胃癌のX線診断学や読影基準について時間を惜しみ、メモ帳に書き込まれているお姿が目につかびます。

最後になりましたが、
馬場先生、長い間ご指導いただき、誠にありがとうございました。

心より感謝申し上げます。



馬場先生，ご指導ありがとうございました

育和会記念病院 中央放射線部 小豆 誠

馬場先生のことについては，先生にご師事されていた銀杏会の中村代表をはじめ世話人の方々から，「撮影技術が別格やで，手でバリウム動かすんやけど噴水みたいになるんや」，「趣味は腕立て伏せで，胃の撮影のために鍛えてるで」など，様々なお話を伺いました。

胃の撮影を始めて3年程度の駆け出しでは，理解困難な内容も多くありましたが，とても偉大な先生だということは伝わってきました。

馬場先生にはじめてご挨拶させていただいたのは，銀杏会の特別講演で講師としてお招きした2006年です。私は精密検査を始めた頃で，なかなか思い描くような撮影ができず，レベルの違いも解り始めていました。馬場先生と先輩方の中に入り撮影テクニックをお聞きしたかったのですが，お話することは畏れ多く，遠くからその様子を眺めるだけであつたことを記憶しています。

いちょう会の代表を2013年に引き継ぎ，撮影・読影・症例検討の講義を行うことになりました。研究会で話す言葉の影響が大きいことを強く実感したのはこの頃で，人に教えるのであればさらに勉強しなくてはと思った時，頭に浮かんだのは先生が主催されていた馬場塾でした。

馬場塾に参加してみると，症例検討の読影では，「なぜ，どうしてそう思うのか」，「その読影の根拠は」などを矢継ぎ早に質問され，しどろもどろになりながら必死で答えました。読影用語の使い方ひとつにも厳しさがあり，今まで経験することのなかった緊張感のある症例検討でしたが，今思い返すとそれも馬場先生スタイルであつたと思います。塾が終わり場所を変えたG. I. Labでは，馬場先生が癌研究会付属病院時代に撮影された精密X線写真を偶然発見し，そのあまりの美しさに言葉を失いました。

また，事前に連絡もせず症例を持参した時も，塾の2症例目として検討していただきました。最終診断は3型進行胃癌の症例でしたが，私はIIC型早期胃癌を疑い撮影していました。撮影では病変を現す技術的な部

分、読影ではIIc型早期胃癌と3型進行胃癌を鑑別する読影の根拠のほか症例検討のスライド構成などをご指導いただきました。先生のご指導は、厳しい中に今後勉強を行う上で苦労しないようにと思う親心と優しさが感じられました。

馬場先生と一緒にベランダでタバコを吸いながら、「大阪でガンバレよ」と励ましてくれた言葉を胸に刻み、今も大阪で頑張っています。馬場塾は吉田先生を筆頭に世話人の方々も先生の直系です。後学のため、現地開催があった折には是非とも参加し、またあの雰囲気を感じたいと思います。

最後になりましたが、馬場先生、胃癌X線診断の先駆者として精度向上にご尽力いただき、心より感謝申し上げます。

馬場先生が撮られた美しい精密X線写真を目標に、今後も精進して参ります。

もう走らず、ゆっくり奥様とお過ごしください。



馬場先生にいただいたもの

安房地域医療センター 鈴木 一志

2011年、人事部長から突然呼ばれ「鈴木くん、馬場先生って知っている？」と聞かれました。当時、学会やレベルアップセミナーなど、たまに出席していたもので「あの馬場先生ですか？」と返したのを覚えています。その時の私は学会や勉強会でよく講義をしているちょっと怖めの先生という印象だったもので、その後人事部長から「今度当院に来るからよろしく」と言われ、不安になりました。

当院に来る前に技師と話がしたいとのことで、人事部長に一席設けたからと言われ、緊張しながら赴くと、ニコニコしながら「胃がん検診で困っていることないか？」と聞かれました。当時、私を含め技師側は胃がん検診に基準撮影法を取り入れたいと考えていましたが、胃がん検診の委員会では「充盈像は必要」の意見が多く、8枚法とはしていましたが、基準撮影法は取り入れられていませんでした。ここぞとばかりに馬場先生の名前を前面にだして、なんとか基準撮影法を取り入れたいと思い、相談させていただくと「よし、わかった」と返事をいただき、そこからはあっという間に話しが進んでいきました。委員会では私の基準撮影法の説明と、馬場先生のご教示により、ほぼ反対意見はせず、すんなりと案が通りました。

当院に在籍されていた1年半の間は、とにかく技師に寄り添っていただき、厳しくもありますが、技師のスキルアップにご尽力いただきました。週一回以上の症例検討会か撮影レクチャーを繰り返していただき、回数は1年半で50回以上となりました。これは、東京胃会10年分に匹敵すると思っております。1年半の間には、術前精査の撮影を撮影室と一緒に入り経験させて頂いたり、症例の作成を習ったりと、濃密な時間を過ごさせていただき、楽しいことが大事と食事にもよく連れて行ってくださいました。

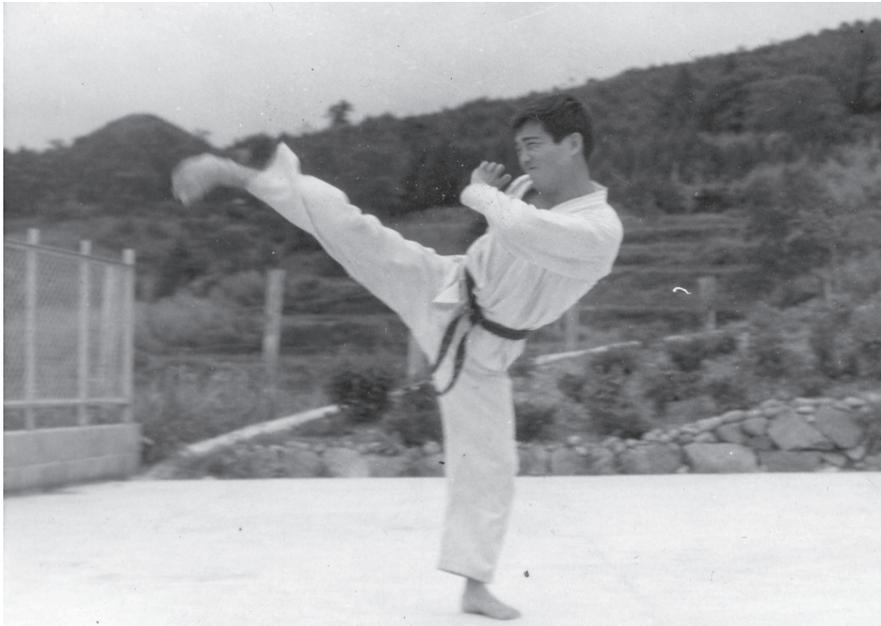
この1年半の間、恵まれた環境に身を置いていた私は、胃がん検診において、技師を率いてくれた馬場先生が当院を去ることが不安で、同僚の濱崎と、これからは自分たちがご教示を受けにいかなくては、また元

に戻ってしまうという思いで東京に足繁く通うこととなります。鈴木と濱崎ということで馬場先生には、「スーさん、ハマちゃん」（釣りバカコンビ）とあだ名をつけていただき、いろいろな場所で馬場先生が話をしていただいたそうで、どこに行っても「君がスーさんか、馬場先生から聞いているよ」と挨拶されました。

私たちがいろいろなところに顔を出しやすい環境をあらかじめ作っていただいたことに感謝の気持ちでいっぱいであり、馬場先生のおかげでいろいろな方と出会えました。馬場先生を中心に同じ志を持った方々や、千葉ではあの馬場先生に習ったということで、研究会に誘われました。馬場先生に出会って、ご教示いただいたことも宝ですが、いろいろな方と出会わせていただいたことが一番の宝であり、この出会い、繋がりは一生涯大切にしたい思いです。

隣で空手の型をやって仕事の邪魔をする先生、たばこの先 2cm に害はないと適当なことを言う先生、鋭いまなざしで症例を説明する先生、10年以上経ちますが、いまだ鮮明に思い出します。

パワフルで活動的だった先生なので、安らかにはされていないと思いますが、ご冥福を心よりお祈りいたします。



馬場先生を偲んで

六角会代表世話人

東京Jr.胃会世話人

公益財団法人福岡労働衛生研究所 高木 優

私が馬場先生のお名前を初めてお聞きしたのは、私自身が胃X線検査に従事し始めた2002年になります。2002年といえば、日本消化器がん検診学会に新・胃X線撮影法が答申された年で、胃X線検診において大きなターニングポイントとなった年でありました。当時、私の施設では従来法とよばれる撮影法を採用しておりましたが、精度の良し悪しなど考えることもなく、ただただ沢山撮ることに重きを置いて検査を行っておりました。大喝ですね。

そんな中、職場の先輩に連れられて土日会という胃X線勉強会に参加したのですが、講師である前川進技師から新・胃X線撮影法のこと、画像精度のこと、撮影手技のことなど沢山のご指導をいただく中で、ことあるごとに馬場先生のお名前とエピソードが語られました。当時はよくわからないまま話を聞いておりましたが、今思えば、その時が私の中での馬場先生との最初の出会い（実際にお会いはおしていませんが）であったと思います。

その後、私自身が中原慶太先生と前川進先生に師事させていただく中で、馬場先生が執筆された著書や論文を拝読する機会、沢山のご講演を拝聴する機会に恵まれ、本当に沢山のことを学び、胃X線撮影技師として成長することができました。また、直接ご指導いただく機会も徐々に増え、2013年に開催されたはがくれ胃会での症例検討会では手厚いご指導をいただいた結果、最優秀読影賞を獲得することができました。ほとんど馬場先生の誘導に従って発言していただけでしたので大変恐縮でしたが、トロフィーを馬場先生から直接授与されたことは大変嬉しく、誇りであり、忘れられない思い出となっております。ありがとうございました。その後、2015年に発足した東京Jr.胃会胃会の世話人となり、発表を担当させていただく際にも手厚くご指導を賜りました。特に第2回東京Jr.胃会胃会の造影効果に関する発表を担当した際には、沢山の

時間を割いて、厳しく、そして優しくご指導いただきました。このときの経験は、私の中での“考える”ということへの取り組み方とアウトプットのしかたにおいて、また、言葉を大切にすることにおいて、大きな影響を及ぼしました。このことは学問の世界だけでなく、日常の仕事や生活においても、とても役立っております。

また、馬場先生の優しさを物語るエピソードとしては、2019年に福岡で開催した六角会と東京Jr.胃会胃会の合同大会も思い出されます。当時、馬場先生は公私ともに多忙なこともあり、ご来福は難しいとのご見解を示されておりました。しかし、討論者としてのご参加をお願いしておりました45分のセッションのためだけにご来福下さり、セッション終了後にはすぐに東京に帰られたのです。当大会の成功のため、後輩たちのため、胃X線検査の精度向上のためを思ってことであつたと思えます。本当に感謝してもしきれません。そして、最後にお会いできたのは2019年11月に開催された第7回東京Jr.胃会でありました。この打ち上げの場でもお話しする機会に恵まれ、「もう読影補助とか、技師読影とかいう言葉はやめなさい。読影は読影でしょ？」とご教示いただいたことを思い出します。

それ以来、コロナ渦となったこともあり、お会いすることがないまま、昨年訃報が届きました。まだまだ実感が湧かず、東京に行けばまたお会いして、ご指導賜り、スナックでは美声を聞けるような気がしてしまいます。まさかのカントリーミュージック、最高でした。

馬場先生と出会えたこと、沢山のご指導を賜ったことは、私の大きな財産となっております。馬場先生が天国で少しでも安心して、ゆっくりお過ごしいただけますよう、私たちは胃X線精度の維持、向上に努め、馬場先生が常々おっしゃっていた“伝統と革新”を推進していきたいと存じます。ずっと見守っていただければ幸いです。さいごにもう一度言わせてください。

馬場先生、本当にありがとうございました。

2023年7月15日

踊り

船員保険 北海道健康管理センター 高橋 伸之

馬場先生、

先生が酔って、“ごきげん”になったとき、よく踊っていましたよね。
あの踊り、名前ついているんですか？ ついに、聞きそびれてしまいましたが、あの踊り、北海道では、「ばぼっち踊り」と呼んでいました。

初めて私に披露してくださったのは、平成17年NPO精管構 第1回学術集会の日の夜、大塚のスナックで、「お前も一緒に踊れ」と言われ、付き合わされましたよね。そのときは、「なんだ！？奇妙な踊りだなあ！」と思っていました。正直、さほど楽しくなかったです

でも、その年、札幌ニューテクノロジー研究会で、初めて馬場先生にお越しいただき、ご指導いただいた日、懇親会の三次会のスナックでは、心の準備もしていましたので、「でました！」という気持ちで、お付き合いさせていただきました。すると、北海道の連中ですから、すぐに皆、立ち上がり、「踊らにゃそんそん♪」っていう感じで、皆思い思いに、ヘンテコな踊りをし始めましたよね。あれは、むちゃくちゃ楽しかったです。そのとき、馬場先生が、「この踊りには、“志那の夜”が一番踊りやすいんだ」と何度もリクエストされていましたよね。あのとき、たまたま歌える人がいたので、盛り上がりましたが、翌年、同じく、馬場先生をお招きする段になったとき、“志那の夜”どうする？って、皆悩みました。だって、あの曲、今どき歌える人は、なかなかいないですよ。それで結局、杉沢が、「よし、CD買って覚えよう！」と発案し、千恵が、すかさず買ってきて、皆で練習したんですよ。

振り返ってみると、学術的な準備より、宴会のほうを心配するあたり、北海道ならではのエピソードかなと思っています。まあ、女性ということもあり、田形千恵が、一番よかったです。後日聞かせていただいた馬場先生の奥様の歌声には、全然及ばなかったです。確かに、奥様の“志那の夜”は、踊りやすかったです。徐々に馴染んできたあのころ、私は「ばぼっち踊り」に、ハマっていました。馬場先生のいない忘年会の二次会とかで、踊っておりましたあー！

と言っても、馬場先生には、よくダメ出しされていましたよね。「もっと上品に踊りなさい」とか．．．「もっと歌に寄り添って」なんて．．．

それでも何年か経つと、「おお！上手になったじゃないか！」と褒められたりして。

やったー！馬場先生の学術的な門下生は、大勢いらっしやると思いますが、踊りの弟子は、私ぐらいだったんじゃないですか？ うひょひよ。とてもとても良い思い出です。

他にも、症例検討で、馬場先生が司会、私が読影者になれば“掛け合い”しながら読影したり、楽しい思い出がいっぱいです。

夢で逢う馬場先生はいつも通り元気なお姿なのに．．．

近況報告です。最近はオンライン勉強会が主流です。終わった後の飲み会ができないのが最大の不満ですが、その代わり、遠隔地の方たちも一緒に参加できるという大きなメリットがあります。なので、馬場先生からの「高橋君が、北海道と東北の面倒を見てやりなさい」という指令。月に一、二度は、そんなに大勢ではないですが、萩原先生・市原先生のご指導のもと、一緒に勉強しています。他にも東海地方の方たちなども加わっていただきながら。

馬場先生のご期待のほんの少しかもしれませんが、今の環境で、できる範囲で、続けていこうと思います。これからは、足りないところは、夢の中でご指導のほどよろしくお願いします。

改めて言わせていただきます。馬場先生の包み込こむような大きな愛をいつも感じていました。その愛に甘えながら、多くのことを楽しく学び、自由に発言し、尊敬しあえる多くの方に出会うことができました。

馬場保昌先生、ありがとうございました。

馬場先生の思い出

元東芝メディカルシステムズ株式会社X線装置担当 富田 泰行

馬場保昌先生のご逝去の報に接し心よりお悔やみ申し上げます。

このたび追悼文をとのご下命をいただき、光栄で恐れ多いことではありますが馬場先生の思い出を綴りつつご冥福をお祈りしたいと存じます。

私が馬場先生に初めてお目にかかったのは本社でX線TV装置を担当していた2005年になってからでした。その後、当時馬場先生がご勤務されていた早期胃癌検診協会に弊社FPD搭載X線TV装置を3台(①近接操作型のKALARE, ②Cアーム搭載のUltimax, ③オーバーチューブ型のWinscope6000)ご導入いただき、開発担当やサービス技術担当も参加してデジタル画像についての勉強会や、画質や操作性の向上についてのディスカッションを定期的に行いました。その最初の会議で馬場先生が1枚のアナログX線写真を提示され、「この画質をめざせ!!」とのご指示をいただきましたが、その二重造影像は何ともしつとりとして立体感があり線状陰影がどこまでも力強く表現されている印象で、デジタルでもその画質に近づくよう再調整の毎日でした。また、馬場先生にご使用いただいたKALAREはスポットショット装置のスライド動作に電動アシスト機構を搭載しておりましたが、バリウムを追いかけるための急峻な操作から、(先生曰く)「圧迫筒表面で女性の顔におしろいを塗るような」繊細な操作まで、完璧にアシストすることが難しく、私どもも工場で同一機種を組み上げて最適パラメータを検討しましたがすぐにはご満足いただけず、ご立腹して会議を退席されたこともありました。

そのような時でも夜、当時文京区本郷にあった馬場先生の研究室におじゃますると「怒られたときこそ来なきゃだめだ」とご機嫌よく迎えてくれて、明日からまた頑張る勇気をいただくことができました。

その後も馬場先生には弊社製品をご使用いただき、工場で直接開発担当者たちに檄を飛ばしていただいたり、弊社DRユーザーセミナーでは何百人ものユーザーの先生方に対して貴重なご講演をいただいたりと、大変お世話になりました。

また、私は研究会等の懇親会にて馬場先生とお話しできることが楽しみでした。最初は必ず「東芝は. . .」とお叱りから始まるのですが、それがだんだん終わると先生の若い頃の「武勇伝」や人生訓のお話に変わり、そこから皆さまとともに至福の時間の始まりでした。

懇親会の終わりに司会の方から「馬場先生～、時間ですのでめてくださ～い！」と呼ばれ、先生が私どもの横を通りながら「何をシメるんだ？東芝の首でもシメるかー」と言いながら壇上に上がる後ろ姿に何と優しくて暖かい先生なのだろうと思ったのも懐かしい思い出です。

今、久しぶりに「胃癌X線診断の究極」を本棚から取り出し、傍らに置いています。ふと表紙をめくると「富田泰行学兄 馬場保昌」と先生の暖かく大らかな直筆のサインが突然目に飛び込み、涙が出る思いでそれを見つめております。

馬場先生、本当にありがとうございました。
どうぞ安らかにお休みください。 合掌



追悼 “ 拝伏 恩師・馬場保昌先生 ”

佐賀県健康づくり財団 中原 慶太

馬場先生、今頃はきっと、2022年3月に先立たれた奥様とゆったりとした時間を過ごされていることでしょう。

私は馬場先生にお会いして以来、どれほど多くのことを教わったかわかりません。先生と出会わなければ、今の自分はありません。決して手取り足取り教えて下さったわけでもなく、あーせいこーせいと言われたこともありませんが、ご自身の日頃の姿勢、行動や態度によって、若輩が学ぶべきことをさりげなく示されていたように思います。

1995年に馬場研究室で研修後、久留米大学消化器内科に帰学した私は、馬場先生や馬場塾をお手本にし、ひたすら胃癌の画像病理診断学の追求に没頭しました。また、森田秀祐先生や前川進技師ら有志とともに、“はぜの木会”や“六角会”という胃X線勉強会を開催しながら、さまざまな議論や研鑽を積み重ねてきました。

その後も上京しては先生にご指導いただいていたのですが、ある日、「これからは思考診断学だよ。中原ちゃんはこれを追求しなさい」とボソッとおっしゃられたのです。

“思考診断学”とはなんぞや??

以来、私なりに考え続け、ようやく最近答えを見出せたかもと思っていた矢先、コロナ禍となってしまう、先生と熱く議論する機会を失ってしまいました。

そこで、今回この紙面をお借りして、私なりの見解を提示させていただきます。

思考診断学の重要なキーワードは、“考える“です。脳の精神活動である“考える“きっかけとなるのが、“何故か?“です。さまざまな事象に対して、何かしら疑問が湧くとそこに関心や興味が生じます。また、ある問いに対する答えが何故そうなのか?の理由をうまく説明することが難しいことや、そこに潜んでいるさまざまな問題点に気づくことができ、やがては正解や問題解決策を見出すことに繋がっていくのです。

このような思考診断学を志向するにあたって、重要となるロジカルシンキング（論理的思考）による検討や議論の仕方を以下にまとめてみました。

ロジカルシンキング（論理的思考）

- ・論理的とは、内容が正しくわかりやすいこと
- ・あるひとつの問いに対して、その正しい答えと妥当な理由を考え探し出すこと
- ・そのためには、物事を体系的に整理し、矛盾や飛躍のない筋道を立てること

ロジカルシンキングによる議論の構成例

- ①問い 論点：疑問・問題 →解決したいこと
- ②理由 根拠：証拠・事実 →実在するデータ・画像
 論拠：保証・筋道 →論文・理論・概念など
- ③答え 主張：結論・意見 →正しいと考えた結果
- 答え合わせ 検証：正誤・妥当性→正解に至る理由の妥当性が大切

答えの理由の妥当性について

- ①客観的であること：誰もが知覚できる事実に基づいている
 - ②普遍的であること：偶然や偏りの影響が少なく、さまざまな事象にあてはまる
 - ③網羅的であること：漏れや重複項目がなく、全体的に過不足がない
- * これらが該当するほど、妥当な理由とみなされる

ロジカルシンキングに必要な3つの力

- ①自分で考える力 : 正解がない答えに対して、自分なりの正解を導き出せる
 - ②人に伝える力 : 自分の考えを、より正確にわかりやすく伝えることができる
 - ③人と一緒に考える力 : 自分以外の人と考えを共有し、問題を解決しやすくする
- * これらが該当するほど、さまざまな問題解決に繋がっていく

馬場先生，いかがでしょうか？ 相変わらず不祥の弟子ではありますが，これまで同様に精進していきますので，イマイチだったり間違ったりしているならば，遠慮なくビシビシとご指摘，ご批判くださいね。

最後になりますが，敬愛する恩師・馬場保昌先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。合掌



馬場先生を偲ぶ

慶應義塾大学病院 病院事務局 中村 祐二郎

馬場保昌先生のご生前の面影を偲び、心からご冥福をお祈りいたします。

私の知る馬場先生は、いつも先生を中心とした学び舎にいらっしやいました。

はじめてお会いしたのは、まだ癌研が大塚に所在していた頃、1993年夏に臨床実習（放射線治療・核医学）で1か月半の間、通っていたときでした。当時の飯塚技師長が父と学友であったため、実習期間中に診断領域のカンファレンスにも参加させていただき、その時に馬場先生と松本さんに初めて対面したと記憶しています。

当時、担当医が検査症例の解説について、馬場先生が指導される一瞬の出来事は、あまりの存在感に強く印象に残っています。

卒業後、私は慶應義塾大学病院の放射線技術室に入職し、新人ローテーションを3年間行っていました。4年目の中旬に消化管造影室へ異動となり、その後は杉野吉則先生の下で研鑽を続けていました。技師の先輩たちは院内の委員会や外部の勉強会や研究会に参加し、忙しい様子でしたが、私は院内に残り杉野先生をはじめ放射線科の先生方や消化器内科・外科の先生方の症例や実験を手伝い、合同カンファレンスの準備や外科の切り出しで病理へ行く毎日を数年間、研修医達と一緒に過ごしていました。

ある日、杉野先生より「私の兄弟子にあたる馬場先生達と研究会を立ち上げるから、参加しながら手伝ってほしい。」と珍しく外の研究会（NPOの前身）に参加することになりました。そこで、馬場先生と松本さんに再会し、ご挨拶をすることになりました。

更に、その数か月後には「馬場先生が塾をやっているから、松本さんに連絡を取って場所と日程を聞いて、定期的に勉強してくるように。」と言われ、慶應に国内研修で来ていた東邦大の医師と一緒に、飯田橋の貸会議室へお客さん気分に参加しました。塾の講習内容は、私たちの知識では到底足りない画像所見の読み方で、殆ど回答できず打ちひしがれ

て帰路に着きました。

その後も消化管X線研究会や東京胃会へも参加するようになり、慶應を出て研鑽する日は馬場塾を含め定期的に馬場先生へお会いに行く生活となりました。そんな中、佐藤清二さんと富樫聖子さんに誘われ、馬場先生の研究室へお邪魔するようになり、早期胃癌検診協会へ伺ったりする濃厚な活動となりました。その頃、吉田先生や山里先生が研究室にいらっしゃり、私が自己研鑽として先生方や先輩達が沢山の症例を比較・対比した資料を閲覧し、実際に自分でも少しずつ真似て作成することを始めました。

馬場先生には気軽にお声かけ出来る環境となりましたが、自身で勝手に考察し答えを出すのではなく、その間の考え方を正しく学ぶことが大事だと言っていた先輩がいました。馬場先生のお言葉も、その場で直ぐに理解出来ない事も多く、後から何度もかみ砕いて他の先輩方に聞き返したりして、数年間を過ごさせていただきました。

そのうち、各研究会や勉強会のスタッフとして活動することになり、馬場先生から「いろは会」という初学者向けの研究会を馬場先生監修の人数・期間限定で、私が代表として開催することになりました。企画や構成、開催場所や期日設定など、初めての取り仕切りを体験させていただき、宮崎武士君をはじめ沢山の仲間に支えられながら行うことが出来ました。馬場先生には、会の運営や構想に対し何度も打合せやアドバイスをさせていただき、出来る限り受講生の皆さんにお伝えすることが出来たと考えています。

その後も東京Jr.胃会では、馬場先生のお声かけで宮崎君を代表に中原先生、前川さん、水町君など九州の方々や北海道の高橋さんが協力し、全国規模で次世代の方たちが参加し易い研究会を開催することが出来ました。

個人の発表では、浜松の研究会に向かう新幹線の中で、私がシンポジウムで発表する内容をギリギリまで手直ししていただき、今までで一番まとまった発表が出来ました。その時も先生は体調がすぐれない中、私の資料を最後まで確認していただきました。

私が知っている馬場先生は、日々生きざまを見せていただけるような姿でした。言葉で表現するには難しいことですが、私以外にも沢山の指導を受けた方々がいらっしゃり、馬場先生を中心に集まっている機会を何度もいただき、その方々とも一つの目標に向かって活動させていただ

きました。

現在は臨床業務とは離れていますが、当時の研鑽方法や一貫した生きざまは、今の私に大きく影響しています。先生と関わった皆さまも、馬場先生との思い出が沢山あるかと思えます。それらすべてが、馬場先生の伝えたい事ではなかったかと思えます。また、受け取った私たちの役割りではないかと考えています。

最後に、様々なことを教えていただき有難うございました。奥さまと安らかに、お過ごし下さい。



安房での思い出

安房地域医療センター 濱崎 由起子

この度の事は突然の訃報にただ驚き、言葉になりませんでした。コロナ禍の3年間に会えなかったことが大変悔やまれます。

馬場先生との出会いは、土曜の午後に誰もいない透視撮影室を知らないおじいちゃん2人が案内されているところに遭遇したのが初めてでした。私は当時、胃部撮影を始めたばかりで馬場先生を存じておらず、馬場塾の本と先輩の話から、怖い先生が入職されると知り、戦々恐々となりました。しかし、最高峰の先生に教わることなどまたとない機会であり、胃部撮影についてわからないことだらけだったので、とにかく疑問に思っていることを聞いてみました。そんな初心者の私にシェーマの書き方から教えてくださり、馬場先生が何気なくお話しされたことをメモする日々が今の私の財産になっています。

当院での馬場先生は患者様には優しく、ユーモラスな診察で、たまにパソコンの動作不良に苛立ち、事務さんになだめられながら仕事を行っていたようです。送別会にはたくさんのスタッフが参加し、盛大となり、みんな別れを惜しんでいました。

胃部撮影は一変しました。撮影法が基準撮影法となり、自分の画像に対する認識が全く覆され、技師間の画像に統一感が出て、明らかに付着がよい画像になったと感じました。また、先生の貴重な症例を惜しげもなく提供していただき、症例検討会を行うことにより読影能力も向上したと思います。安房で行われた精度管理研究会では高名な講師陣による講演や、実際に撮影を見せていただくなど貴重な経験を得ることができ、田舎で行うにはもったいない豪華な研究会となりました。

そして馬場先生が安房から離れる時、この関係が途絶えてしまうことは惜しいと思い、始めて東京胃会に参加しました。胃会にはたくさんの方が参加しており、活気のある症例検討会が行われていました。少し勉強しただけの私には到底理解できず、知識不足を痛感しました。また、

多くの方々に慕われている先生を見て、馬場先生が安房にいらっしやっ
た一年半がいに恵まれた環境だったのかがわかりました。その後数々
の研究会で先生の講演を拝聴し、著書をいただく機会もあり、多くの事
を教えていただきました。また胃部撮影に関わる方々との交流も先生か
らいただいたものだと思います。まだまだ未熟者ですがこれからも
自己研鑽に励みたいと思います。

最後に、安房をお辞めになったあとも親しくなったスタッフと共に
お食事に連れて行ってくれたり、昔の話を聞かせてもらったり、かけがえ
のない時間を過ごさせて頂きました。

馬場先生のお茶目な一面、笑顔が忘れられません。もちろん厳しいと
きのお顔も忘れられません。

馬場先生への感謝と共に、心からご冥福をお祈りいたします。



水谷くんは大丈夫だったのか

荏原病院内科 水谷 勝

2001年4月、九州から東京へ赴任しました。

消化器内科医を目指した私が、東京で2年間の修行に出るためでした。赴任した多摩がん検診センターで、細井董三先生のもと胃X線検査を学ぼうと思っていました。

4月のある日、お茶の水の総評会館(現・連合会館)に症例検討会に参加しました。

医師と技師さんが1名ずつ読影するのですが、慣習として一番若手の医師が読影に当たる決まりになっていました。私でした。司会は馬場保昌先生でした。

自分なりに読影を試みたところ、先生から質問されました。

え？何??

それまで耳学問を頼りに読影してきた私は、先生が何を問うているのかが分からず、長い沈黙の時間が続き、イヤな汗が流れました。

おこがましいですが、ようやく先生のおっしゃりたいことが少し分かるようになった気がします。

胃癌のX線画像はどういう成り立ちでそのように見えるのか？

内視鏡だけでなく、マクロ・病理を突き合わせて検討しないと！

ただ知識として覚えて判断するだけの読影が、どれだけ愚かなことなのかを教えてくださいました。

2012年よりNPOの事務を担当することになり、馬場先生と一緒に会議に参加する機会が増えました。

今から数年前、新年最初の症例検討会が連合会館であり、その後、その場で懇親会がありました。すっかり気持ちよくなった私はある技師さんに誘われ、馬場先生の行きつけの Snackbar へ初めて赴くことに。

かなり酔ってしまった私は、奥様もいらっしゃる中、やらかしてしまいました・・・。

反省会という名の3次会でその技師さんとずっと寝ていたように記憶しています。

次の会議の際に馬場先生に会う際、恥ずかしい気持ち一杯で、顔をお見かけするなりすぐに謝りに行きました。

先生はうなずいただけで、何もおっしゃいませんでした。

後で聞くと「水谷くんは大丈夫だったのか？」と心配されていたそうで、さらに消え入りたい気持ちになったのを今でも忘れることができません。

あっという間の20年間、本当にお世話になりました。



馬場保昌先生を偲んで

公益財団法人 佐賀県健康づくり財団 水町 寿伸

馬場保昌先生のご逝去に対し、心より哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

私が先生の残された輝かしい業績の数々を申し述べることは滅相もございませんが、その業績は綿連と受け継がれていくものと強く信じております。

2001年、私は九州で開催されている「はぜの木会」に参加し始め、その後間もなく、中原慶太医師や前川進技師の師匠である先生に初めてお会いさせていただきましたが、最初は厳しく怖そうという印象であったことを記憶しています。

日頃、私が先生とお会いするのは、先生がご講演される際のNPO日本消化器がん検診精度管理評価機構の学術集会や、各地域の勉強会などに参加したときが多く、これまでの歴史や学術に関する事柄をわかりやすくお話され、いつも興味深く拝聴させていただきました。また、聴講者を惹きつける匠な話術でお話されているお姿が、深く心に焼き付いています。

2009年、先生を九州の地にお招きして開催する「はがくれ胃会（代表世話人 田尻祐二医師）」が発足しました。私は会の事務局を担当しておりましたので、開催前後でお食事をご一緒させていただくことができ、その際に伺うお話でいつも自然と活力がみなぎってくる感覚を覚えました。

2015年、先生が顧問を務められる全国規模の「東京Jr.胃会（代表世話人 宮崎武士技師）」が発足しました。私は世話人を拝命しておりましたので、講義などを担当させていただくことができました。講義スライドを準備する際、何を伝えればよいか、どのように話せばよいかなどをご指導いただいた時間が、深く心に刻まれています。

最後になりますが，私は尊敬する馬場保昌先生がご逝去されたことは
いまだに信じられず，大変心残りでしかたありません。

胃X線検査への取り組み方や症例から学ぶことの大事さなどについ
て，時に優しく，時に厳しくご指導を賜りましたことに厚くお礼を申し
上げまして，追悼の言葉に代えさせていただきます。

2023年4月30日



馬場先生を偲んで 感謝を胸に

宮崎不動産・太陽光発電 専務取締役 宮崎 武士

はじめに、馬場先生からの学びは胃X線に携わる技術や学識を超えて、自身の放射線技師人生に大きな糧をいただいたことを深謝申し上げます。この11年間、すぐ側に同じ笑顔、同じ厳しさを学問の師としてだけでなく所属医療法人の上司としても暖かく支えていただきました。直近では自身が東京から東北へ転勤となったこと、コロナ禍も重なり、お顔を拝察することが叶わず後悔と申し訳ない想いが募ります。

少し前置きが長くなりましたが、学問、知識等の詳細は先輩方が記されることと存じますので、私流の切り口で馬場先生から学んだことを以下に記させていただきます。

五箇条の教え

1. 信頼できる仲間を作れ
2. 義理人情を大事にせよ
3. 若い世代に必要とされる新しいアイデアを常に考えろ
4. 時間があったら顕微鏡を見ろ
5. X線画像をもっとよく見ろ

馬場先生からいつも変わらぬ優しくも厳しい笑顔で、今回もまあまあだなど、頑張れと決して言わずに育てていただいた想い、深い愛情が走馬灯のように今も脳裏を駆けめぐります。先生、手がかかる不詳の門下生ですが、また先生の元で学ばせてください。

今は先生の体力・気力が甦るまで安らかにお眠りください。

馬場保昌先生を偲んで ～シン・撮影法（抄）～

医療法人 親愛天神クリニック 森 一宏

Episode 4. いたずらな芸術家!?

”シャカ、シャカ、シャカ、シャカ、シャカ、シャカ・・・”
リズムのよい音が技師室に響く。

「彼」は自らの手でシャウカステンに翳されたロールフィルムをこれまでに見たことない凄いスピードで巻いている。すると、急にピタッと巻く手が止まる。そして、専用紙に鉛筆の筆圧を上手く使った独特なフォルムで文字を書いた。息をつかぬまま筆を置き、また高速で巻き上げる。

あっという間に終了した。圧倒され眺めていた私のほうを、彼はチラリとみる。

不意に言った。

「観察して、特徴を捉える」

「……特徴、ですか？」

これまで私は、彼とほとんど会話をしたことがなかっただけに、少々たじろいだ。言葉に詰まる私を傍目に彼は筆を握る。

それから彼は複数の撮影体位を一筆で描いて実演してみせた。鼻歌か小言か、よく聞き取れないが軽やかに流れるように描く。しかし私には、なぜこんなにも容易そうに、そして綺麗に描けるのか分からない。ただ、当時、撮影体位で悩んでいた私は、必死に彼の作業を眺め、少しでも自分の中で活かせるように集中した。

しっ、しっ、とペンが紙にこすれる音をききながら、ふと、彼の、いつもならキリっとしている表情が、穏やかな笑みをこぼしていることに気付く。一挙手一投足すら見逃さない思いで観察していた私はあれ、と不自然さに首をかしげる。紙に視線を戻すと、どうやらもう彼はまった

く関係のない絵を描き始めているらしかった。
机の上、花瓶に挿された花。

「花？」

と私は更に首を傾げる。

しかし、絵自体はとても巧みである。彼は普通の絵を描くのも得意だった。大胆かつ繊細に描かれよく特徴を捉えている。そう、特徴である。

「ああ」

となにか、ビー玉がすとんと腹の良い場所に落ちるような感覚があった。

彼は次に、子供の顔と、そして大人の顔を並べて描く。なにも、まったく関係のない絵を描いているわけではなかったのだ。何を描いているのかはつきりと分かりやすく描くこと、そしてその為に、特徴を捉えること。きつと言葉数少ないながらも、彼は私に大切なことを気付かせようとしてくれていたのだろう。

彼はまだ描く手を止めなかった。次に描いているのは、きつと馬だろう。長い顔、頭の上の方につんと先の尖った耳、その間から垂れる鬃。顔の下に大きな鼻。

“流石の馬場先生、よく馬の特徴を掴んでいらっしゃる！” 私は心の中で呟き、馬だと確信した。隣にいたサトウさんが、「あ、馬だ」と呟いた次の瞬間、あれ？ と私はいち早く絵の不自然さに気付いた。眼の位置が近い。よく見ると、眉毛を描いている。気分よく、急にへんてこなものを描きすすめる彼のほうを見ると、何やらふざけているような、少しだけ照れているような、そんな表情をしていた

サトウさんが「馬とやっぱり違う！ なんだこれ！」と叫び、笑い始めた。

私は、既に笑いだしていた。

馬なのか人なのか真意は未だに謎のままだ。
だが、きつと何か意味を持っているのだろう。
それは、”自分自身で思考し(かんがえ)ろ！” と



いつもとは違うお茶目な「彼」の一面を垣間見たように思った。

その日の仕事を終え、私達はタクシーに乗り込んだ。

笑いは一度おさまったものの、やはり思い出すと、おかしくてたまらず、私とサトウさんはまた、どちらからともなくクスツとしてしまう。ちゃんとしなければと必死に笑いを我慢するが、やっぱり私たちは吹き出してしまい、流石の「彼」も

「オイ、いい加減にしろ」

といつもの表情に戻っていた。

二人は肩を震わせ、口を一生懸命閉じたまま、大塚へ早く到着するのを祈った。

— つづく —

あとがき

遠い昔の話ですので、今となると夢の中であったかのような感覚があります。しかし、ふと馬場先生の声を思い出すと、やはりあれは現実であり、そして私の中でとても印象深い出来事だったのだと、不思議な気持ちになります。この出来事がきっかけとなり、私は成長し、職業人としての基礎を築くことが出来ました。心から感謝しています。

馬場先生の残したものは学術・技術や思い出だけではなかったと思っています。

生前、馬場先生は変化を恐れず時代の流れに併せて常に思考し進化を続ける部分と、決して変えてはならない信念や志を認識しておく必要があるとおっしゃっていました。

これは、胃X線診断学だけに止まらず、全ての物事に通ずる教えであると私は思っています。馬場先生の教えを守り、継承していくことが私達残された者の使命ではないでしょうか。

馬場先生、これまでありがとうございます。これからも私達を見守っていて下さい。

ご生前の面影を偲び、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌

馬場先生の思い出

森田 秀祐

馬場先生の研究室は見るからに老朽化した建物の一角で、8畳くらいの部屋にたくさんの茶封筒に入れられた物が棚や段ボール箱に所狭しと並んでいた。無知な私の最初の印象は「なんだか物がたくさん置いてある雑然とした部屋だなあ」だった（馬場先生ゴメンナサイ）。しかし私がその“雑然とした物”の中から一枚のX線写真を見た時、その芸術的な美しさ、画像精度のすごさに圧倒され、しばし感動に立ちすくんだ。それらは先生が長年蓄積された症例のX線写真等の資料であり、“珠玉の宝庫”であった。

馬場先生は忙しいかどうかに関わらず、ほぼ毎日夜遅くまで研究室にいた。当然教え子もその場にいることになる。途中（かなり早い段階）で先生は缶ビールをシュポッと開ける。「飲まんね」と言われて私達もシュポッと開ける。部屋の中には小さな台所があり、先生は私達のために晩ご飯を作った。これが驚くべき腕前であった。なんでも若い頃に喫茶店で働いた経験があるらしかった。味もさながら、量も半端ないのであった。しかも先生ご自身は一口味見程度でほとんど食べないので、ほぼ全て教え子達の分となる。私達が一応1人前を食べて一息ついたと思いきや「森田ちゃん食べんね」と言われる。私は「折角作ってくださったのだから」と思い、なるべく食べるようにした。

実はこれが良くなかったかも知れない。「森田は食べるやつ」と思われたのか、その後しばしば「森田ちゃん食べんね」攻撃を受ける羽目になってしまった。もちろん教え子に食べさせて可愛がるお気持ちもあったのだろうが、途中（早い段階）からは私が頑張って食べる様子を面白おかしく眺めておられていたような気もする。

先生は、若手医師や放射線技師を対象に胃X線診断の症例検討会をしばしば開催した。場所は病院内放射線部の廊下兼待合室のような所だった。症例検討会で読影者として発言することは、慣れないうちはそう簡単に言葉が出てくるものではない。特に馬場先生を目の前にしてはなお

さらである。私もそういう1人だった。言葉がなかなか出てこない教え子に、先生は適切な表現、言葉を一つ一つ教えてくださった。

また私達にはそれまでに各自勉強した乏しい知識があった。しかしそういう知識に基づく表現が適切でないと判断された時、先生はすぐにツッコミを入れた。教え子は戸惑う。そういう時先生は“見えたまんまに、なるべく平易な言葉で”表現するように徹底して教え込んだ。お陰様で私を含めてその勉強会に参加した人のほとんどが、何とか読影者として発言できるようになった。

勉強会の後には参加者達全員が研究室になだれ込む。部屋は人で溢れかえる。テーブルの上には馬場先生が作った料理と缶ビールが並んでいる。それをみんなで飲み食いしながら先生を囲んで歓談する。学問的な話だったり、ユーモアを交えた雑談だったりする。そういう時の馬場先生はとてこやかで楽しそうだった。

馬場先生、ありがとうございました。



馬場先生を偲んで

みさと健和病院 安藤 健一

私は、診療放射線技師になりたての頃から消化管造影検査にとっても関心がありました。しかしながら就職した病院は特に消化管造影検査に力を入れている施設でもありませんでしたし、胃がん検診等の撮影件数はあまり多くもなく、もちろん研修指導体制も整っていると言える環境ではありませんでした。

しっかり勉強するには自施設だけではなく外に出て勉強しないといけない・・・

技師になりたてでしたけれど、何となくそんなふう感じておりました。

そして何の紹介や誘いも、また、知り合いの技師やつながりもありませんでしたが、当時、茅場町の早期胃癌検診協会で開催されていた馬場塾に飛び込みでビジター参加しました。そこで講演等以外で、馬場先生と初めてまじかで対面させて頂きました。

私は自ら手を挙げ読影しましたが、司会の佐藤清二さんから、『根拠の無い読影は・・・』と冷静に厳しくご指導いただき、私は冷静さを失い、記憶が無くなるくらいのショックを受け、レベルの違いや知識の浅はかさを思い知らされました。

覚えているのは、馬場先生が、シャーカステンから漏れる光に薄暗く照らされ、奥の椅子に微動だにもせずただ一点を見据え腕組みをしてお座りになられていたことです。そのオーラにあらためて圧倒されたことを今でもよく覚えております。その後、数年の時がたち、馬場先生が指導医・顧問として、ご指導いただいていた馬場塾・東京胃会・東京Jr胃会に世話人の立場で勉強する機会に恵まれました。これらの研究会の世話人の役割・任務は、会を円滑に運営するだけではなく、先ずは自らが主体的に胃X線撮影学と胃X線診断学を学んだり研究したりすることが求められます。そうした前提で世話人としての役割を果たす。これらは暗黙の了解であり、それらの継続が、我々に出来る『継承』のひとつであると拝察しております。

具体的には、症例検討会での読影のご指導は勿論のこと、馬場塾・東京胃会・東京Jr胃会での講義・講演のためのプレゼン作成や症例検討会の症例準備等では、非常に沢山の事をご指導いただきましたし、学びました。当時、馬場先生の研究室があった、G.I. Labに毎回、何度も何度も出向き、先生の業務・研究の合間に直接ご指導を頂きました。時にはPCに向かって直接 PowerPoint ファイルに加筆・修正いただき、時には紙媒体に直接赤皮膚ペンや鉛筆で訂正して頂いたり、シェーマを描いてご指導いただきました。我々診療放射線技師になじみのない病理画像の見方についても研究室の顕微鏡で直接ご指導いただきました。顕微鏡は自由に使って良いので、自分で病理プレパラートをみて病理画像(マイクロ画像)を撮影しなさい、と宿題を頂きました。その度、吉田先生や松本さんにもサポート頂きました。毎回、終電ギリギリまでの作業になりましたが、非常に勉強になりましたし、とても充実した時間でした。

馬場先生は非常にお忙しい中、いつも必ず時間をとって丁寧にしっかりと説明して頂き、普通では経験できないまさにスペシャルなご指導を頂いた、と感謝しております。また、研究会終了後や馬場塾の忘年会等で、毎回、最初は非常に緊張しながら乾杯するという、なかなか経験できない飲み会の場もとても良い思い出です。

余談ですが、馬場先生に、たまたま私の注腸X線検査の画像をみていただく機会がありました。何症例かみていただき、お褒めの言葉を頂いたことがありました。私は個人的に、注腸X線検査が得意でしたが、まさか馬場先生にそのようなお言葉をかけていただけるとは思いませんでしたのでとてもうれしかったです。そして、そうした検査技術や臨床的に診断価値のある画像を世に伝えるべきだと・・・注腸X線検査の研究会を発起して始めてみては、とご助言を頂きました。それを目指して何度か準備会議を開催し、具体化できるよう進めましたが、いろいろな事情で実現には至りませんでした。今思えば個人的には非常に後悔しております。

この数年は、コロナ禍の影響で、直接ご指導を頂く機会がありませんでした。そうした中での馬場先生の訃報に非常に衝撃を受け、信じられない思いで言葉がありませんでした。

馬場先生，謹んでご逝去を悼み，生前の温かいご指導に対し，あらためてお礼申し上げます。先生が仰っておりました，胃X線診断学の継承の一翼を担えるように，頑張っていきたいと思います。馬場先生，安らかに休息いただき，私たちを見守っててください。



馬場先生を偲んで

三菱UFJ銀行 健康センター 梶本 昌志

私が馬場保昌先生からご指導頂けるきっかけになったのは、まだ技師免許を取得して間もない頃、先生の主宰されていた馬場塾への参加に遡ります。当時の会場は、壁には、いろいろなメモが貼り付けられ、たくさんのX線写真やプレパラート、書類袋が積まれた本郷の研究室。間接のロールフィルムを読影される場面を初めて拝見したのもこの場所でした。緊張感と好奇心が入り交じった複雑な思いで参加していたと記憶しています。

あるとき、先生から、

「あなたに300万円払うから、胃の中に癌を作ってください。1000万ですか。1億ですか？いくら払ったら癌を作らせてくれますか？」

と、質問されました。さらに続けて

「そうじゃないでしょ。いくらお金を積まれても、誰も自分の胃にわざわざ癌なんか作りたくない。だけど癌になってしまった人がいる。私は、そういう人達の命がけの写真をいい加減に読むことなんてできない。」

そうおっしゃいました。先生から伝わる迫力とそこから発せられる言葉に、私は先生の症例に向き合う真っ直ぐな姿勢を知り、それ以来この言葉に励まされ、時に逃げ出したくなりながら今も技師を続けています。

またある時は、

「まちがっても恥ずかしいことはない。あなた方は、分からないから勉強会に参加しに来ているでしょ。分かっているなら勉強会なんか参加しなくていい。」と、いつも温かく見守っていただきました。

塾生として症例解説文の校閲をお願いした際には、初めはパソコン上で原稿データを修正されていた作業を、パソコンを開く時間もないほどお忙しい時には、原稿をプリントアウトして移動中の電車の中で手直ししていただくこともありました。なぜ、そうまでしていただけたかを考

えると、それが先生の症例に対する真剣な姿勢であり、勉強会に参加する人に向けて伝えたい思いを込められていたからではないかと思えます。

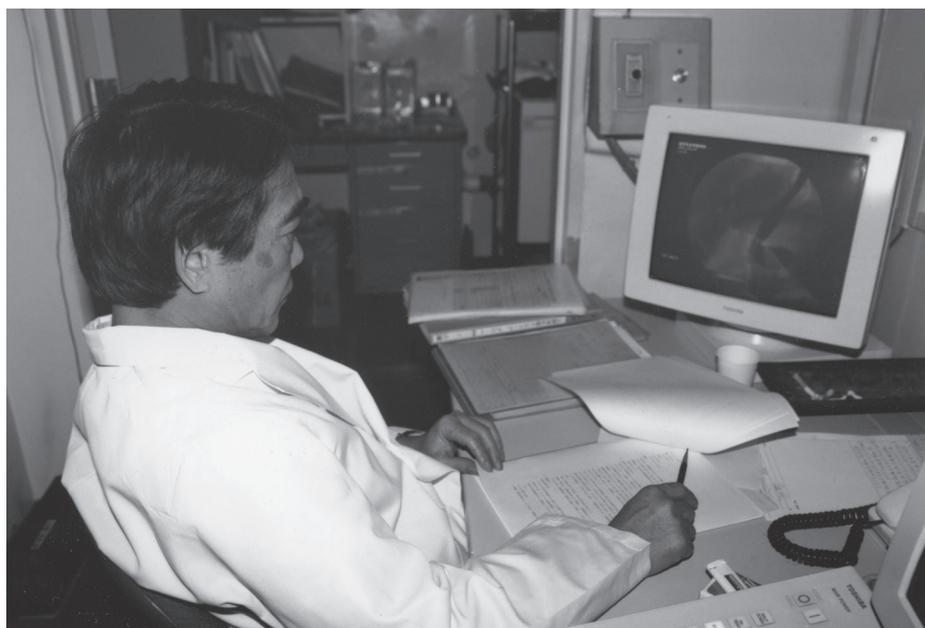
先生は、

「撮影装置や撮影方法はその時代ごとに変わる。でも取り組む思想、一生懸命やる姿勢はずっと変わらない。」

とおっしゃっていました。

私はこれまでただ勉強がしたくて、馬場先生の言葉やテキストの文字を一字一句正確に読みとり、暗記することばかり行って参りました。しかし、参加するだけの立場から、症例や資料を準備する立場になると、その暗記したつもりの内容は他の人に伝えるだけの知識として自分の中に落とし込めていなかったことに気づかされました。今は、先生の遺してくださったテキストを何度も読み直し、参考文献を調べ、馬場先生の伝えなかったことは何かを考えています。G.I.Labに保管されている馬場先生の研究資料や症例を前にすると、これほどの量に至るまでに費やした時間や先生の思いの強さがずっしりと伝わって参ります。この資料をこれからの人のために活用させていただきます。

馬場先生、いままで大変お世話になりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



馬場先生を偲んで

元 東京都予防医学協会 佐藤 清二

馬場先生、その後いかがお過ごしですかー 不肖の弟子佐藤です。

馬場先生との出会いは、35年ほど遡ります。

そこから私の人生は一変し、苦しくもあり楽しくもあり充実した生き方をさせていただきました。

当時先生は40歳過ぎ、保健会館の消化器外来をご担当いただいた頃からと記憶しております。その後数年が経ち、ある日“医者はX線診断をしなくなる。これからは、お前たち技師がX線検査診断をやって行かなければならない。癌研(大塚)の研究室で勉強会をするぞ!!”と、言われるまま勉強会に参加することになりました。馬場先生と、故)松本史樹技師はじめ癌研の技師と富樫技師、九州から研修に来られている先生たちとで毎週の症例検討会です。当然のこと、X線診断に関わる勉強もしてきていなかったの、読影の担当では言葉が出ず辛くて辛くて逃げ出したい気持ちでいっぱいでしたが、参加者の皆さんから助けをいただき、“ここで逃げては男が廃る”の思いでなんとか乗り越えてきました。症例検討会は診断思考が論理的で自分で納得できたからだと思えます。

書籍「馬場塾の最新胃X線検査法」。医学書院、2001では、馬場先生ご指導のもと、松本技師や坂東技師、富樫技師と出版社とで何度も編集会議を行い、書籍が出来上がるまでの過程に関わらせていただきました。当時はアナログX線画像でしたので、癌研写真室の高野さんに印画紙焼きのご指導をいただきながら深夜まで暗室で作業を行い何とか形にすることができました。とても貴重な経験をさせていただきました。

また、「胃がんX線検診新しい基準撮影法マニュアル」。NPO精管構、2009発刊では、当時勤務しておられた早期胃癌検診協会で“茅場町コンセンサス”を経て、吉田先生、松本技師、木村技師、富樫技師らと基準撮影法の構築に関わらせていただきました。

忘れられないのは、研究室での料理の時間です。馬場先生は空腹の弟

子たちへの配慮で19時頃から仕込みが始まるのですが完成は早くて21時過ぎ・・・ビールを飲みながらいただきます。先生より早く帰ることはできませんので、その後は座ることなく24時頃まで、早く“帰る”と言ってくれー!!と思いながら過ごしたこともとても懐かしく感じます。今では自分で料理することの楽しさを感じています。

ゴルフにカラオケと何度もお供させていただきました。歌が苦手な私に“誰でも100回やればできるようになる”と同じ歌を繰り返し歌わされました。今では歌うことが楽しいと思えるようになりました。ゴルフでは、15歳も上なのに飛ばし屋でしたね。スコアはまとまらないけど・・・

などなど振り返れば数えきれないほど記憶が蘇ります。

先生は全てお見通しでした。私が研究室に行けばほぼ深夜帰宅、キツくて苦しいと思っていることも承知の上で、やれる環境を与えて、達成させることで成長すると考えておられたのだなと思います。

己に厳しく、周囲に優しく、頑固者の研究者の背中を30年あまり見してきました。多くの人に学びを与えながら、ただひたすら胃X線検査・診断を愛し、その将来を熟慮し、来る日も来る日も研究に打ち込む姿を決して忘れません。

厳しくも優しくご指導いただいたこと、心から感謝申し上げます。

どうか安らかに休みください。

感謝

G. I. Lab 株式会社 田中 克昌

「お前は下手やのう，今度の土曜日に練習に行くか！」

馬場先生とプレーバートでのお付き合いをさせて頂くきっかけは，17年前に新潟県のある得意先で馬場先生にご講演を頂いた翌日，馬場先生を囲んで一組でゴルフをご一緒させて頂いた際に馬場先生から言われたこの一声でした。

その翌週の土曜日から約1年間，毎月2～3回のペースで，馬場先生の練習場のホームである，ご自宅から車で5分程度のJR王子駅近くのサンスクエアゴルフ練習場に二人で通いました。

いつも決まって，馬場先生のご自宅前で早朝に待ち合わせ，練習場に着くまでの車内で本日の練習メニューの話が始まります（馬場先生は練習初日から私の目指せスコア80台の一連の練習メニューを既に決めておられました）。練習場に着くと受付カウンターの馴染みの店員さんに挨拶した後，練習場1階の正面を向いて左側のなるべく奥の打席を並びで2つ選び，私の打席の真後ろの打席を馬場先生，そして打席まで歩く通路の途中で蒸したタオル二つを馬場先生が取り，私は缶のジョージアブラックコーヒーを2本買って，いつも打席に着きました。二人それぞれ体慣らしにピッチングから打ち始めますが，そのうち馬場先生の練習締めドライバーを打つ音が無くなり，私の背後から馬場先生の缶コーヒーをプシュッと開けた音が聞こえてきたら，指導開始です。

私はそれまでに身についた癖がなかなか抜けず，しばしばというか学生の部活の練習まがいに相当に馬場先生の厳しい罵声？叱咤を受けました。そのおかげでしょうか，ある日に練習場について打席まで歩く通路の所々にある柱に，「個人レッスンはご遠慮ください」の張り紙が出ていることに二人で気づきました。

馬場先生の指導は本当に厳しく，一球入魂でした。練習初めの頃，私が疲れて適当に腕をこねくり回しながら打っているものなら，後ろからすぐにチェックが入り，一球入魂だぞ，気合入れてしっかり打てよ，こうだよ，と指導を受け，私も相当本気で練習に励み，何とか人様に迷惑

をかけない程度にはスコアを纏めることができるようになりました。

練習の帰りには、馬場先生が私より一足先に打席を後にし、練習場横の持ち帰り専門の寿司屋「やすけ」で奥様とのご自宅でのお昼ごはんの買い物を済ませ、私の家族のお昼分までお寿司を持たせて頂くのが恒例でした。

馬場先生との二人だけのこのエピソードを書きながら、当時が懐かしく思い出されます。普段の仕事でのお付き合い以外での、馬場先生の厳しくも優しく愛情のあるお人柄にも触れ、とても楽しく貴重な時間でした。練習時に毎回要点をメモした手のひらサイズの手帳には、馬場先生が私にわかるように体の軸の図を描いて説明されたページが残っています。

普段の伏見製薬MRとしての仕事においても、もちろんのこと、馬場先生には都度ご指導賜り、本当に色々とよくして頂きました。

そんな馬場先生が、一昨年2月に大病されていることが分かりました。闘病生活を過ごされた1年8か月の間、治療のための通院や職場及びG. I. Labとご自宅との道中と、多くの時間をご一緒させて頂きました。

私事ですが、昭和18年生まれで馬場先生とは1歳違いの実父が25年前に病気で他界しており、その頃上京していた私は実家に戻らず、結局父の看病をほとんどすることが出来ませんでした。大病した馬場先生が父と重なり、馬場先生が公私共に息子のように接して頂いたこれまでのあらゆる御恩に報いるためにも私に出来る限りのことはお手伝いさせて頂くつもりで日々ご一緒に過ごさせて頂きました。

馬場先生、本当によく頑張られましたね。馬場先生の生き抜く姿勢をはじめ、馬場先生との御縁を頂いてからこれまで、本当に多くのことをご教示いただきました。馬場先生の教えを胸に、馬場先生に怒られないようこれからも精進してまいります。

心より篤く篤く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

どうか安らかにお休みになられてくださいますよう、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

馬場先生を偲んで

富樫 聖子

私が馬場先生に初めてお会いしたのは、放射線技師として働き始めてからですので、もう37年前になります。週1回、本会の外来診療の後に、技師室で読影をして頂いていました。入職当時、癌研の馬場先生というすごい先生が読影にいらっしやっていると聞かされ、先生が読影する写真は馬場方式として区別し、撮影装置は指定され、バリウム、発泡剤の量など、他とは違う方法で撮影していました。その撮影法は、バリウムを胃壁に付着させる、前壁撮影は圧迫用フトンを使用し腹臥位二重造影で撮影する、上部は右側臥位二重造影で撮影するなど、今では普通となっている方法ですが、1980年代後半の一般的な胃部撮影では見られないものでした。

その後、馬場先生の精密検査の撮影見学にお声がけいただきました。初めて見る先生の精密検査は、緊張感がいっぱい、写し出された画像は素晴らしく、それまで見たことのない胃癌の写真でした。当然、私たちが撮影していた検診や、精密検査と称して撮影された写真とは全く違うもので、“これが本物か”と思い知らされました。

その頃から、癌研で毎週行われていた症例検討会に参加させていただきました。研修で来られた若い先生、癌研の技師の方々と一緒に、画像の見方と考え方を教わりました。さらに、本会で発見された胃癌症例の追跡調査を始めるようにもなりました。癌研への紹介がほとんどでしたので、森田秀祐先生はじめ研修に来られていた先生、松本史樹技師にお手伝い頂き、馬場先生の撮影した精密検査写真や病理結果を見せていただきました。1993年と1997年には、馬場先生のご指導のもと、間接撮影法(対策型検診)での充盈像と二重造影像での病変描出率を検討し、二重造影像のみの撮影法の提案を学会誌に発表しました。

それから、技師の読影が取り沙汰されるようになった頃、技師の研修会だったと思います。胃集検の大御所の先生から、切除胃標本のスライドを提示されて「これは消化性潰瘍の症例です。これを診断するためにどうやって撮影したら良いですか？あなた、馬場先生のところで勉強し

ているんでしょ。これくらいはわかるでしょ。」と言われたことを忘れません。充盈像は撮影の基本とされていた頃です。馬場先生の教えを学ぶことと新しい道を創ることの使命と責任を強く感じました。

馬場塾をはじめ、東京胃会や本会の症例検討会では、馬場先生は常に「なぜだ。どうしてだ」とおっしゃられていました。読影する過程と根拠を重要視されていました。もし、結果が間違っていたとしても、どこの見方や考え方が違っていたのかを求めて修正したら良い、とおっしゃっていました。つい怠けてしまう私にとって、馬場先生とお会いして直接、先生がおっしゃったことを聞き逃すまいと思って症例検討会に参加していました。振り落とされないように必死でしがみついて、今まで来たように思います。

ほかにも、ゴルフ、カラオケ、奥様のお誕生日はカサブランカの贈り物、馬場先生のお誕生会、先生の料理、一升瓶でゴルフのスイング練習、ラーメン屋での説教、色々な場面が思い出されます。

“俺には時間が無いんだ、時間があるとは思うな。”とおっしゃっていましたが、これからも、私たちに叱咤激励してくださるように思っていました。こんなに早くお別れするとは・・・

馬場先生、先生の厳しさ優しさは忘れません。ありがとうございました。

ご冥福をお祈りいたします。

継 承

伏見製薬株式会社 山下 真司

馬場保昌先生お元気ですか？

天国でも医師を続けて症例検討会や講演をしていますか？
それとも、プロゴルファーか料理人になっていますか？
どんな職業に就こうと、先生はその道を極めるまでやり続ける男ですから、一流になっていることでしょう。

思い出の北海道講演

毎年8月の北海道での講演は恒例行事でした。この恒例行事は約10年間続きました。先生はいつも「せっかく遠くから来たのだから朝から症例検討会をやろう」と言い、朝から夕方まで症例検討会と講演会、その後は明け方まで麻雀大会、説教ラーメンと続き、翌日はゴルフというルーティンがいつのまにかできていました。この行事は忍耐力が鍛えられた場でしたが、おかげさまで北海道の技師さんとも交流を持つことができました。

先生の知られざる一面

・鉄人

日課：腕立て1,000回、スクワット1,000回
そのパワーで70歳を超えてもドライバーの飛距離は300ヤード近く飛ばしていた。結局78歳まで医師を辞めずに生涯現役を貫いた先生はやっぱり鉄人だった。

・「忙しい」を言い訳にしない

先生からよく宿題を出され、返事が遅れ「ちょっと忙しくて」と言い訳をすると、「寝る暇があるなら、忙しくないだろう」とよく言われていました。先生はレジュメ一つにしても、手抜きをすることはなかったのでもいつも寝る時間を惜しんで執筆作業をされていました。

・黒ラベル(ビール)とタバコ

講演後の先生を囲む会でお店を探すときは、まずビールは黒ラベル

が置いてあるか、タバコは吸えるかを店員に尋ねていました。この条件がそろっていないと、どんなに素敵なお店でも他を探していました。

・義理人情に厚い男

著書「胃癌X線診断の究極」の「序」のページに執筆の手伝いをした伏見製薬社員の名前が掲載され、先生から感謝の気持ちが書かれていました。今となってはこれが最後の書籍になりましたが、本人たちは「一生の宝物です」と言っていました。先生の義理人情を感じた一面でした。

・実は雨男だったのではないか

よくゴルフをご一緒しました。かなりの確率で雨が降ることが多く、特に北海道講演会の時の恒例ゴルフ大会は雨が降ることが多く、私は良く先生に雨男と言われましたが、実は先生も雨男だと思っています。

・先生は絵が上手

先生は絵が上手で自宅や研究室にたくさんの絵が飾ってあり、絵は100回描けば誰でも上手く描けるようになると仰っていました。よく胃のシェーマを描いては技師さんにお渡しになっていました。

最後に

伏見製薬に入社して27年、そのうちの約23年間常に馬場先生と過ごしてきました。馬場先生からは、ここには書ききれないほど多くのことを学びました。今の私があるのは、間違いなく先生の力が大きく影響しています。大変感謝しております。

これからも、今まで以上に精進していき、先生から学んだことを無駄にせず、後輩たちに継承していければと思います。そして、馬場先生イズムが胃癌X線検診に携わるすべての従事者に継承されることを願います。

以上

やっぱり、場が大切です。

慶應義塾大学病院 予防医療センター 吉田 諭史

馬場先生、ご無沙汰しています。

20数年前、消化器内科医として駆けだした私に対し、先生は胃X線診断学という学問の道を指し示してくださった恩師であり、また人生の節目節目で助言や励ましをしてくださった恩人でもありました。先生は厳しくも優しく、私そして私達に対して、知識だけでなく、人としての品格や志をも教えてくださいました。おかげで、私は自分のライフワークを見つけ、それに向かって取り組み続けることができています。

と、胸を張ってご報告したいところではありますが、現実には、何につけても学びが足りず、反省しきり、後悔しっぱなし、の毎日を過ごしています。2020年初頭からはじまった新型コロナ感染症によって日本も世界も様変わりし、先生の肝いりだった東京胃会、東京Jr胃会は、今も休眠状態となっています。また、先生が二代目理事長をおつとめになったNPO法人日本消化器がん検診精度管理評価機構は、2023年度の事業展開を最後に解散することとなりました。現理事長の杉野吉則先生をはじめとして、中原慶太副理事長や水町寿伸副理事長、そして事務一般をとりまとめて頂いてきた水谷勝先生には、船が港に着くまでご迷惑をおかけすることになると感じています。

一方、先生のお名前を冠した馬場塾としての勉強会は、富樫聖子世話人代表、梶本昌志副代表、佐藤清二世話人、安藤健一世話人の努力と、伏見製薬東京営業所の山下真司所長、藤原猛様、丸山福矢様の支援により、2021年4月以来今日まで、オンラインで症例検討会を開催することができています。

また、先生がお書きになった「胃X線読影に必要な基本的な事柄」を底本として、世話人レクチャーを準備し公開しています。2022年度の1年間は、レクチャーの副題を「頑張って読んでみた」とし、同著をはじめから終わりまで読み通すことができました。2023年度は、「先生、ここが

分かりません」を副題とするレクチャースライドを準備しながら、馬場先生に質問するつもりで、もう一段著書の理解を深めようと考えています。

「馬場塾オンライン」の参加人数は当初目標に満たないのですが、先生や前世話人代表であった浅田栄一様や故 松本史樹様が継続してこられた馬場塾の先進性や社会性は、参加者の人数によって価値が量られるものではありません。先達から渡されたパスを、私達が受け取り、それを次の世代に繋ぐことによって、今ここに存在しない方々をもメンバーとして含み、過去と未来の双方向に向けた伝統的で古典的な学び舎として継続できるようにいたします。

いつのことだったか忘れてしまいましたが、「何かを達成しようとするとき、大切なことは何か」と問われ、「信念とやる気、そして、中村恭一先生がおっしゃっていたように言葉でもってよく考えて、繰り返し人に伝えることでしょうか」と私が答えた折、「違う。場だ」と諭されたことを、最近よく思い出します。イデオロギーの塊とか生粋のパイオニアとして馬場先生を捉えていた当時の私は、とても意外な感じで聞いていましたが、今はそのことの意味が分かってきたような気がいたします。

事業や企画を達成するための原動力となる知性などというものは、個人に宿るのではなく、集団にしか発動しない。また、ある個人が知性的であるかどうかは、その個人が個人として所有する知識の量や知能指数や能力によっては量ることができない、ということをおっしゃりたかったのではないのでしょうか。そうではなくて、その人がいることによって、その人の発言やふるまいによって、その個人の属する集団全体のパフォーマンスが、その個人がいない場合よりも高まったときに、事後的にその人は「知性的な人」だったと評価を受けるのだらうと思います。馬場先生はまさにそのような先生でしたし、常にそのように振る舞っていらっしゃいました。

笑いが消え、意欲が低下し、疑心暗鬼となり、誰も創意工夫をしなくなってしまうことにならないようにしたい、と考えています。最近の私は、諮らずもそうした場をつくってしまったことを実感していますから、これを機に静かに考え直してみたいとも思っています。私にとってこうしたことが難しいことは、私自身が充分承知しているつもりなの

ですが心配無用です。

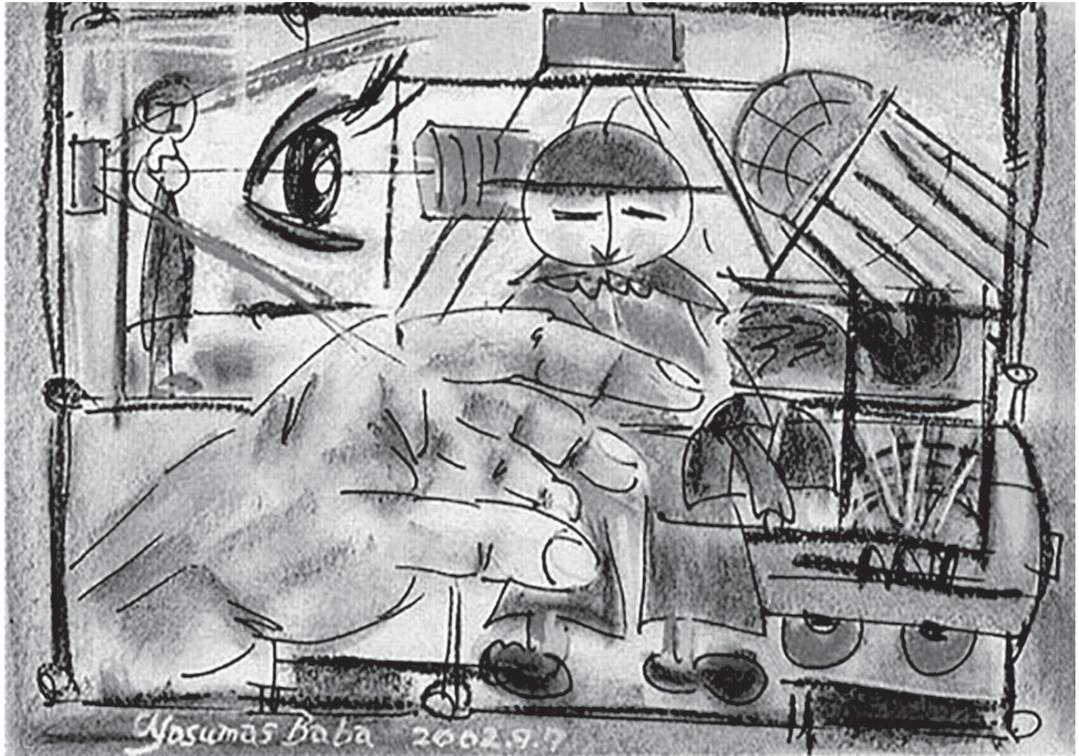
あれだけ厳しかった馬場一門への入門者であり、最後の最後に破門されても耐えきった私ですから、ちょっとやさっとじゃへこたれません。

また、お手紙します。先生もお元気でお過ごしください。

追伸です。

馬場塾に保管されているX線フィルムや内視鏡フィルムのほか、切除標本写真やプレパラートを本年4月から整理することになりました。学術研究や症例検討会の材料として役立つとともに、症例ライブラリーとして活用することを目的としています。貴重な資料が山ほどありますから、すぐに達成できるとは思えませんが、馬場塾世話人や伏見製薬東京営業所の皆様のほか、G. I. Lab 株式会社の伏見俊毅社長をはじめとして、田中克昌様、倉田和季様、河内直輝様、川口陽仁様らと知恵をだしあってこのミッションを成功させたいと思っています。





馬場保昌先生を偲ぶ会 追悼文集 デジタル版

2023年10月03日発行

著者 ご執筆を快諾して頂いた皆様

発行・編集 追悼文集制作委員会

富樫 聖子

梶本 昌志

佐藤 清二

安藤 健一

山下 真司

田中 克昌

藤原 猛

丸山 福矢

伏見 俊毅

富松 久信

杉野 吉則

吉田 諭史

2023年10月03日 馬場塾オンライン定例会において